
戦人の迷宮探索（改訂版）

乙黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦人の迷宮探索（改訂版）

【Nコード】

N0765Y

【作者名】

乙黒

【あらすじ】

世界発の仮想現実の技術が使われたゲーム、“ダンジョン・セルボニス”がついに発売された。世界中のゲーマー達が待望したゲームをプレイし、ログアウトすると一転。——地獄の迷宮探索が始まった。主人公である青年は、この世界独特の強さである——レベルやスキルそれ等が最低ランクだった。ゆえに、この世界の元の住人や、新しく現れたゲームプレイヤーから嘗められる日々が続く。やがて大きな渦に巻き込まれた彼は、善につくのか、悪につくのか、その大きな選択を強いられるのだった。

この作品は、戦人の迷宮探索（仮題）の改訂版です。前回はあまりに稚拙な作品だったので、思い切って書き直すことにしました。読者様には多大な迷惑をおかけしますが、今後はこちらの作品のご応援をお願いします。

第零話 プロローグ（前書き）

まだ序盤ですが、できるだけ早く前まで追いつきたいと思っていますので、これからも応援お願いします。

第零話 プロローグ

太陽の光が閉ざされた深い闇の中で、壁に生えている白い花だけが明かりをくれる通路があった。天井は高く、右を見ても左を見ても壁。幅は狭く、幅は二メートル程。

そんな通路はただ長く、後も先も闇だけが広がっていた。

ここは、迷宮ダンジョンと呼ばれる場所だった。秘宝が、財宝が、金銀が、数多く眠り、荒稼ぎしたい者にはとっておきの場所である。

だが、そんなメリットばかりの迷宮ダンジョンだが、そこには危険もある。
トラップ モンスター
罠や、怪物が潜んでおり、時には命を失うこともあるのだ。

だが、それが苦とせず、迷宮ダンジョンを突き進むのが、“冒険者”という生業だった。

命を糧に金を求め、犠牲の果てに栄光がある。

冒険者とは、そんな職業であつた。

そんな場所にただ一人——灰色の青年は立っていた。

彼は、変わった青年であつた。

麻製の服の上を灰色のマントをで包み、顔は愉悦で染まっただけ、ただ歩みを進めるだけ。

云うならば、一般人の“格好”だった。これで町に出ても、なんらおかしくないだろう。間違つても、命を糧に金を求める——冒険者の格好ではない。

そんなここに不釣り合いな彼が、ここに居たのは理由があつた。それは生きるためだ。

急に独りになった彼は、現在金目の物を持っていなかった。生き

るためには金が必要だ。その金を稼ぐため、彼は冒険者になったのである。

今の彼は、そんな職業に就いて早一週間経っていた。

冒険者という職業に慣れない最初は戸惑いもあったが、今は“ある理由”からこの職業に悦びさえ覚えていたのである。

それは、彼が狭い通路をしばらくの間進んだ時のことであつた。そこでは目に強い光が現れ、光の中から音が聞こえたのだ。

「くつそお！ どうしてこんな低階級にこんな高レベル怪物モンスターがいるんだー！」

それは、不運を嘆く、哀れな者の声であつた。
悲痛な声が聞こえる場所は、通路の終わりだ。だが、その続きは壁ではなく、大輪の白い花が天井を多い尽くすほどある広い空間がある。

そこは、剣呑な空気であつた。

中世の鎧を着た三人の“冒険者”と、人より二回りも大きい金属で覆われた二足歩行の人によく似た体の構造を持った怪物モンスターがいて、お互いがお互いを目で牽制しあっていた。

敵を睨みながらも、弱弱しく立っている冒険者の武器は、それぞれ槍と棍棒と弓だ。

この三人は既にこの戦闘の数分前、力量レベルが22の敵を十体倒して

おり、本来なら宿に帰って休みたいところだった。
ゆえに体調が万全ではなく、呼吸も深呼吸である。

彼等とは反対に、堂々と立っていた怪物モンスターの姿は——異様だった。
防具のような纏っている金属が赤色。体の前に逆さに置いた太く、
分厚い大剣でさえも赤色である。

その姿は、血を喰らって生きる——まさしく“物の怪”だった。

イレギュラー
「異常なんて……!!」

三人の“冒険者”内の、誰かが口にする。
イレギュラー
異常とは、本来存在する怪物モンスターの突然変異で、それは通常の物より
強い。

今のままでは異常イレギュラーに勝てない、それが三人の冒険者の心境だった。

それは彼らが、力量レベルも技スキルも足りなかったからだ。

力量レベルとはその者の強さを数字で表し、通常は高ければ高いほど強い。

そんな力量レベルで異常イレギュラーを表すと40程。

逆に三人を力量レベルで表すと、彼らはそれぞれ20位しかなかった。

それは、冒険者である彼らが、生贄という代償を用意しても、異常イレギュラー
常十人集まってやっと一人生き残れる確率だった。

これだけでもその強さは明らかで、三人に勝ち目は無い。

ところで、技スキルとは武器の熟練度を上げることによって、それを一定以上貯めるとそれぞれに適した技スキルが開放され、その者の体力に応じて何回か使えるようになる一定の現象のことだ。

その現象には色々あり、例えば剣から衝撃波を飛ばせたり、練習

もしてないのに槍を連続で突けるようになる。など、様々な種類があった。

「諦めるな！ 諦めなければ勝機は必ずあるはずだ！！」

また、三人の内の誰かが言った。

無駄だろう、と灰色の彼は思う。

何故なら彼らが向かう出口は、^{イレギュラー}異常が塞いでおり、自分がいる方に逃げても外には出られず、むしろ迷宮の奥へと続く道なので、もしかしたら“より”強大な敵がいるかもしれない。

——だから、三人は“このまま”の状況では、^{イレギュラー}異常に勝つ以外に、生き残る手段は無いのであった。

「仕方ねえ、ちょっと英雄になってくるか」

そんな絶望的な三人の光景を目の当たりにした彼は、わざとくさい台詞を吐きながら一歩踏み出した。

彼の歩みの矛先は、^{イレギュラー}異常へと真っ直ぐ続く。

相手は難敵にも関わらず、淡々と、まるで家の中を歩くように、彼は足を進めるのであった。

「き、君、止めとけ」

三人の内の槍を持っていた一人が、彼を止めた。

彼の無謀な挑戦を止めさせようとしたのだ。

何故なら彼が、目ぼしい武器も、目ぼしい防具も持っていないからだ。

だからだろう。その一人は、防具どころか武器すら持ってない彼を、その見かけから弱いと判断したのだ。

「本当に……本当に……死ぬぞ!!」

いや、見かけだけではなかった。

彼は力量^{レベル}すらも低かったのだ。それは三人の冒険者よりも、圧倒的に低かった。

「どけ。邪魔だ」

だが、口角が上がっている彼は、その止めた者の手を乱暴に払った。

先程、英雄になる、と大層に言っていた筈なのに、彼に三人を助ける意思是全然無く、むしろ彼には異常^{イレギュラー}と戦いたい気持ちのほうが大きいのである。

どこまでも彼は——獣のような“餓えた”人間だった。

「——さあ、戦^やろうぜ」

五メートル先にいる彼の発言で、異常^{イレギュラー}は剣を構えた。両手を突き出し、その太い腕で大剣を支える。

これで事実上、彼の宣戦布告を異常^{イレギュラー}が受け取る形になった。

ダッ!

そして、先に仕掛けたのは、灰色の彼だ。

上体を前のめりにし、己が出せる最高スピードで、異常^{イレギュラー}との距離を一気に詰める。

キリキリッ!

敵は彼が近づくのが分かると、独特の歯車が回る音を出しながら、大剣を驚異的な速さで振り落とした。

彼はそれを、右にかわす。が、完全には敵の大剣はかわせず、皮膚を浅く切った。

だが彼は怪我を気にもせず、イレギュラー異常の背後に回る。それは大剣をもう一度振らせる暇など与えないほどのスピードであった。

「——まっ、死ねや」

次に灰色の青年は背を駆け上がり、両手で大事そうに、顔らしき部分を持った。

そして、首を力強く——廻す。

瞬間、首元からは瞬間的に鈍い音がし、首は顎が上になるように折れる。

そして彼は背から下り、首を——限界まで下に引っ張る。

すると、どうだろう。

捻られ、引っ張られたコードは、それも首にある多種多様の色で覆われたコードは、あまりの“力”に耐え切れず、無残にも千切れる。まるでロボットの首が取れたかのように、彼は敵の首を——取ったのである。

「えっ……！！」

イレギュラー奇想天外な異常の斃し方に、三人は大きく目を見開き、驚愕した。やがて、彼の手首についた時計のような無機質な声が——鳴った。

——ピコーン、レベル力量が11になりました。

第一話 日常

「ほれ、避けんか！」

早朝、静かな山奥にしゃがれた声が響いた。それは眠気を邪魔するのには、最適な殺気だった声であった。

だからか、危険を察知した小鳥達が飛び立ち、木々がざわめく。

「うるせえ！ ジジイこそ孫相手に背中を狙うな！！」

次に森に響いたのは、低い青年の声。こちらもドスの効いた“怖い”声だ。

そんな二つの声の出所は、山の中腹にある小さな神社の裏手にある板間の道場だ。

中にいた者は——二人。

どちらも一流と云える武芸者であった。

片方の青年は汗で黒く汚れた道着と白い帯を着ており、背は170後半。腕や足などの体は遠くから見れば細く見えるが、実際に近くで見ると常人の“それ”より太く、細かな傷もついており一般人の腕とはまるで違っていた。

そんな青年と対峙していたのは、白髪の老人。

青年と同じような道着だったが帯の色だけは黒で、それだけでも強いと錯覚する。そして、その老人の最大の特徴は青年より細い体躯で、筋肉も然程しかない肉体だ。しかし、無駄な贅肉もついていまさしく、 unnecessary 肉を全て削ぎ落とした体だった。

そんな風貌の二人は、殴り合っていた手を止め、一旦距離をとっ

た。即座に二人は睨み合い、——同時に踏み込む。

青年は拳で、老人は足で、それぞれを狙い、やがて拳と足が激突した。

一般的に手と足では足のほうが三倍強いと云われるが、この二人の威力は同等だった。

若い故の青年の優れた瞬発力が勝ったのか、やはり老いた老人の肉体が負けたのかは分らない。

だが、どんな結果であろうと、威力が同じだった“事”に違いはない。

なので、二人はその結果に大した動揺は見せず、すぐに次の行動へと移る。

最初に仕掛けたのは青年だ。

ぶつかった右手をすぐに引つ込め、右手で老人の胸倉を掴む。老人は蹴りだった為、次の動きへと移るのは遅れたが、それでも負けてはいなかった。

老獺とまで云われる、永い年月をかけた技術のみで青年の胸倉を掴んだ腕を、左で持ち、肘を右手で逆方向に——極める。

「糞がつ！」

しかし、青年もすぐに反撃した。

関節が極められていない逆の二本の指で、咄嗟に老人の目を狙う。

「うわっ！ 危ないのう。いたいけな祖父を殺すつもりか？」

老人はこれに対して急いで両手を離し、後ろに上体を倒す。ようするにスウェーであった。

「いーや、老人思いの俺が、そんな事するわけないだろ。それより、ジジイも折るつもりだったのか？ 俺の右腕」

「いーや、孫思いのわしが、そんな虐待のような事するわけないじやろ」

似たような答えを返す二人。

青年は口では笑っているが、目が笑っていないかった。勿論、老人も口では笑っていたが、目は笑っていない。

「ははっ……」

「ほほっ……」

両者とも分かっていた。

乾いた笑いをしながら、お互いがお互いに本気だったのを。しかし、表面上では冗談のように振舞っている。

とんだ茶番だ。

本当を知っているのに、あえて知らない振りをする。

だが、そんな偽りは長くは持たない。込み上げる激情は、そう我慢できるものではないのだ。

「死ねやっ！！」

「くたばれっ！！」

やがて、似たもの同士の二人の堪忍袋の緒が同時に切れ、——またぶつかり合った。

「はあ……」

こんな朝が、あの二人には毎日のように訪れていた。メビウスの輪のように、昔から永遠と続いていたのだ。

だからか、この光景を、もう千を超えるほど見たこの光景を、道場の外から見ていた女性がそつと嘆息する。

「氷雨^{ひなめ}もお祖父ちゃんも止めなさいっ！！」

そして、大声で二人を止める。

二人は何度も交わりながら戦いあつたのが、目に見えるほど汗をかいている。これを見た女性は、また洗い物が増えた、と溜息を吐いた。

先程の一瞬は、この二人にとっては、ほんの短い時間なのだった。彼女の声が耳に届くと、そんな二人も動きを止める。

両者とも相手に対するぎらつく目を押さえ、エプロン姿の彼女に目を向けるのだ。

「ほう、もう朝食か。小僧、命が助かったな」

「そついえば腹が減ったな。ジジイこそ死期が早まらなくてよかったな」

戦いが終わった後の、こんな言い合いも日常のように行われていた。

そんな祖父と弟には、同族嫌悪の言葉がよく似合う。

性格も、戦い方も、遺伝子でさえも似ている二人。
だから、まるで自分を見ているようで苛立つ。

何故、自分も同じような遺伝子なのにこうはならないんだろうと、
彼女は不思議に思った。

（そういうわけね。性別が違うからか）

勝手に彼女はそう納得する。

もとより、こんな疑問などどうでもいいこと。
なので、適当に理由づけるのであった。

それは、これまたいつもどおりの静かな朝食の風景だった。畳に
置かれた長いテーブルに姉弟そろって座り、その向かいに祖父が座
る。

それぞれの目の前には焼き魚と味噌汁とご飯が置かれ、テーブル
の真ん中には白菜の漬物が置かれていた。

「姉ちゃん、たしか今日が発売日だよな」

先程戦っていた青年が、味噌汁を啜りながら尋ねる。

今は道着ではなく黒い学ランを着ている彼は、エプロン姿の彼女
の弟で、あの老人の孫だ。

名は、南雲氷雨。
なぐもひる

高校二年生の彼は、一般的に見れば地味であった。

今は春先なので長袖。だから服の上からでは筋肉は見えず、細

かい傷痕も見えない。

勉強の成績は平凡的で、理数系が少し苦手な程度。

体育は少し得意だが、それも部活に所属している者には負ける。
専門職の人間には、いくら彼でも敵わないのだ。

顔つきは目が少々鋭いだけで、ほかに目立つようなことはない。

髪は染めてもなく普通の黒色である。

友達も多くもないし少なくともない。クラスの皆と喋るが、いつもは4、5人ぐらいのグループにいる。

これまた地味だ。

当然ながら、そんな彼に目立った噂はなく、今後も生まれる予定がなかった。一つあるとすれば、姉の話題ぐらいだろう。

クラスの女子には、「ああそんな人いた」としか認識されてない。さらにクラスの全員が、彼が山奥に住んでいるので祖父から武術を嗜んでいる事など、友達も知らない。

ゆえに学校の皆には、氷雨は一般人としか認識されていなかった。

「ええ、そうよ。ちゃんと氷雨の分のゲームも、予約していたから安心していいわよ」

「ふう、良かった。もしも俺の分が無かったらどうしよう……」と思
つてたところだな」

お茶を一杯口につけた彼女が氷雨の問いに答える。

彼と彼女が言っているゲームは、本日発売の世界初VRMMORPG、“ダンジョン・セルボニス”だ。

これは実際に体験できる“バーチャルリアリティ”という最新のバーチャル技術を使ったゲームで、“リアル・カモフラージュ”という機械を使うことによってそのゲームに応じた仮想現実へと行け

るのだ。

その画期的なシステムが使われた第一陣のゲームが“ダンジョン・セルボニス”で、彼も彼女も楽しみにしていたのだ。

「それも見てみたいわね」

「……勘弁してくれよ」

優しげに氷雨に微笑む彼女の名は、南雲雪^{ゆき}。

少しの乱れもない真っ直ぐな黒髪は長く、肌は真珠やシルクのように白い。目はぱっちり^{二重}で、セーラー服からは体の細さが伺える。

正座をしながら朝食を食べている彼女は、誰が見ても日本人形のように美しいと思うだろう。

学校で勉強の成績がよかったり、運動が出来たりと、彼女は優等生扱いされていた。さらに美人だが誰とでも分け隔てなく接し、優しいと、校内でも男女問わず人気の高い女性だ。

地味な氷雨の話題がクラスで挙がるとしたら、殆どが彼女の弟だということでもあった。

「にしても、姉ちゃんがゲーオタだって学校の皆知ったら、どんな顔をするんだろうな?」

「驚くんじゃないの?」

「なあ、冗談で姉ちゃんがゲーオタって、言ってもいいか?」

「——殺すわよ?」

「だ、だよな……」

雪は氷雨の質問に、箸をばちんとテーブルに叩きつけて答える。
まさしく雪のような冷たい殺気が、彼女からなだれ出た。

誰もが羨むような完璧さを持つ彼女にも、やはり隠しているとある“秘密”があったのだ。

それは生粋のゲームオタクだという事。

携帯ゲームからテレビゲーム。それまたネットゲームまで、RPGなら大体手を出している。ほかに^{シューティングゲームカラスターバースン・シューティングゲーム}STGやFPSなど、種類は様々だ。

だが、彼女はそれが回りに知られると、自分の周囲の評判を落とすことをよく分かっており、それをひたむきに家族以外には黙っていたのだ。

「ふん、氷雨に一言釘を刺しておくがな。いくら、ばーちやるりありていーでも、武術の腕はまったく上がらんぞ！」

朝食の途中、ゲームの話題があがる度、祖父は氷雨にことある度にしつかりと言い聞かせていた。

いくら仮想現実でも本当の現実とはまるで違う、ということだ。
祖父は薄々だが、氷雨が誰かと戦いたがっていることに気づいていた。

交通事故によって親を亡くした孫を引き取ると、二人を甘やかしてはいけないと心を鬼にしながら己が嗜んでいた武術の稽古をつけた。

その方向性を氷雨だけちょっと間違えたな、と思う。
雪は別だ。

彼女はいい姉として、いい女性として、素晴らしく成長した。
だが、氷雨は違う。

彼の組み手相手は、幼少の頃から実の姉と祖父だけだった。

——故か、氷雨は血に餓えている。

「けっ、だからなんだ。ジジイには関係ないだろ」

食べ終わっていた氷雨は、祖父に悪態付きながら、学校の準備に自分の部屋へと戻った。

「おじいちゃん、じゃあ私も行くね」

「お、おう。氷雨を宜しく頼むな」

「うん、分かってる」

と、彼のすぐ後、雪も部屋へと戻る。朝食の食器は全自動の食器洗い機に入れば済むので、それは祖父の仕事だ。雪に迷惑をかけるため、祖父が自ら提案したのであった。

そして、その数分後、姉弟の二人は学校へと出かけた。

「はあ……」

そして、二人が学校に向かった後、こうして縁側で神主の格好をしながら、祖父は一人考えに耽った。

——修羅道へと堕ちれば、二度と人へは戻れない。

祖父は知っている、堕ちた者の人生を。

祖父は知っている、堕ちた者の結末を。
しかし、いい案が出ない。

「さてどうしたものかのー」

だから白髪の老人は、そう溜息を吐くのであった。

第二話 学校

別段大きくもなく、小さくもないどこにでもありそうな校舎。

校舎の中からは吹奏楽部だと思える楽器の音に、そのすぐ隣にあるグラウンドでは野球部やサッカー部などによる練習が行われていた。

そんな学校の門を、氷雨と雪はくぐる。

二人が通っている学校は、周りにある学校より平均的に学力は少し低く、しかし他県まで有名な部活動はない。

要するにどこにでもありそうな高等学校だった。

「それにしても、疲れたな……」

「私も……眠たいわね」

そんな普遍的な学校を、彼らを選んだのに理由があった。

——近いからである。

彼らが住んでいる山の神社から一番近いこの学校でも、徒歩で最低二時間はかかる。この学校は自転車通学が出来るのだが、それを使うとより時間がかかるので、二人は徒歩で近道として柵を越えたり、道なき道を越えたりしていた。

二人はそんな苦労をしながらこの学校に通っている。

なので、一緒に通学するような友はいなく、一人で通っても暇なので、二人で喋りながらいつもこの学校の行き来をしているのだった。

「じゃ、氷雨また帰りね」

「ああ、またな」

そして、玄関で上履きに履き替え、そこで姉弟は別れた。
弟である氷雨は、そのまま三階にある二年生の自分の教室の扉を開けた。

「よ」

「おはよう！」

「よっ！」

そんな軽い挨拶を氷雨は低テンションで交わしながら、教室の中にある自分の机に座った。隣の引っ掛けに斜めがけのカバンをかける。

「それにしても、いいよなあ。南雲はあんな綺麗な姉がいて、毎日一緒に登校できて。オレならきつと禁断の感情が生まれてるぜ」

「オレもオレも。いや、オレなら襲ってるな。そして……ぐふふ。
はあ、本当にいいよなあ、南雲は」

氷雨が席に着くと、すぐさま彼とこのクラスで仲がいい二人の男子が寄ってきた。

だが、まだ朝に必ず行われるSHRには二十分程度の時間があり、いつも氷雨がいるグループにいるメンバーには足りない。

もう一人は、いつも朝のSHRギリギリに学校に来るのである。

「おいおい、お前らは俺と会うといつもそれだな。それ以外に言う

ことはねえのかよ？」

氷雨はまたか、と低く二人に返した。

これは、彼の友達である彼らの雪に対する賞賛は挨拶のようなものだ。

毎日飽きることなくやっており、だが二人にも氷雨の友達として“常識”はある。だから、“礼儀知らずの氷雨達の先輩”とは違い、脅迫じみた姉への紹介の催促はしないのだ。

「無い……かな？　だって南雲って、大体の話題は軽く流すじゃないか！　ほかにどんな話題に食いついてくれるんだよ？」

「うんうん、氷雨って名前どおりに、冷たいじゃねえか。お前は、よ」

「だよな。オレもそう思うよ」

二人は、氷雨にわざわざ目を伏せながら話した。気分はさながらハリウッドスターである。

「そうか？　そりゃあ、悪かったな。今度からは、もうちょっと付き合っよ」

氷雨はまんまと騙されて、目を丸くする。

そんないつもとは一風変わった戸惑うような氷雨を見て、二人の同級生は大きく笑った。彼はまんまと騙された、と舌打ちをしたのだった。

「あー笑った笑った」

「お前ら……いつか殺してやる」

「うわっ！ 怖えよ、南雲！ そう怒るなって……」

「そうそう、確か今日が“あの”発売日だよな」

そんな笑い声も終わると、話題は変わった。

それは、今テレビのニュースでも話題のVRMMORPGの“ダ
ンジョン・セルボニス”である。ゲーム好きでなくとも、一度はや
つてみたいゲームナンバーワンと有名で、この話題性は未だ尽きて
いない。

「あのゲームかあ、欲しかったが金……がなあ……」

このゲームの発売価格は、世界初の体験できるゲームとして様々
な最新技術を使っているとの理由で、ソフトとハードのセットで十
万円とされている。

「いや、金があっても無理だろ。だって限定5000セットだぜ。
オレ達にはコネがない限り無理だな」

そして、このゲームのもう一つのネックが、その入手経路。これ
は日本の企業が作ったので、どの国よりも早く日本で先行発売され
る。その数は五千個であったが、予約は既に開始してから十分で終
わっていた。

コネが無いと手に入れるのがほぼ不可能に近かったのである。

「確か、オークションには百万と書いてあったよな。つまりあれだ
けの大金があればオレたちにも……」

だが、数個だけこのゲームのセットがオークションで販売されているのがあった。数少ないゲーマーたちの希望の星だ。

「あれって、詐欺も多いとテレビでやってたなかったか？」

氷雨がここでやつと発言した。

最近二ニュース番組で知った知識を、言ってみる。

「だよな。つまり、オレたちがプレイするのは何年後になるか……」

彼の友達の一人在落し込んだ。

その詐欺は現在社会問題にもなっており、一か八かでそれに賭ける人も少なくはないのだ。

「あーあ、雲林院うんりんいんのような金持ちの友達がオレにも居たらな……」

「無理無理、あいつはイケメン久遠にぞっこんだったろ。つまり、オレ達はおこぼれをもらうぐらいしかないわけだ」

久遠、今この名前がチラツと出たが、彼はこの学校では雪並みに有名であった。

名は光。ひかる

顔や目付きや鼻が欧米人の祖母の影響で酷く整っており、髪は金色。スポーツも上手く、勉強の成績も高い。そんな男として完璧な要素をもち、またこれを自慢しない謙虚な性格さえ持ち合わせる。なので、この学校の女子からは王子だと言われることもしばしばある。

要するにイケメンで、隙がない優等生なのだ。

そんな彼であるからして、困っている女子を助けることが多く、

非常にモテていた。その中の一人に雲林院という日本を牛耳るようなお金持ちまでいるのである。

そして、今はそんな彼が雲林院から希少価値の高い“ダンジョン・セルボニス”の、お試しプレイを今日やるという情報まで回っている。

だが、もし彼に手を出せば学校中の大多数の女子から非難を受ける羽目になる。

だから、そんな彼と正反対の三人は、こうやってひそかに彼の事を愚痴る事しか出来ないのだ。

「そういえば、南雲の姉ちゃんはいつに惚れてなかったよな？」

「そうだそうだ。その点もあってこの学校では一番人気が高いんだ。やっぱりいいよ。お前の姉ちゃん」

ここでまた話題が氷雨の姉に戻った。

雪はミーハーなほかの可愛い女子たちとは違い、久遠に全くなびかない。

その点が、彼女がこの学校で男子達の人気を数多く集める理由の一つだった。

（けっ、姉ちゃんは男よりゲームなんだからしょうがねえだろ。）

だが、氷雨は心の中で思いだしたことがある。

彼の姉の雪は他の女子に比べて、久遠に助けられる“こと”自体が無い。

そこらの不良には、氷雨と同じ武術で簡単に蹴散らすし、弱みであるオタクも家族以外には完璧に隠蔽しているからだ。

「それに彼氏がないのもポイント高いよな」

「そうだな。南雲、たしかお前の姉ちゃんあんな辺境に住んでるか
ら男との接点もないもんな」

最後に彼女は、男より“ダンジョン・セルボニス”に関心が向け
られており、彼氏を作る気などさらさらなく、現在も過去も居ない
のだった。

「もう、この話題やめようぜ？」

氷雨は嫌そうに言った。

それは、それがどんないい評価であれ、身内の話はあまりしたく
ないというむず痒い思いからだった。

「分かったよ。それじゃあ次は一年のあの子の話にするか？」

「いやいや、それよりも、テレビで話題のあの女優の……」

キンコンカンカーン！

ここでSHRの開始のチャイムが鳴る。

「よ～～う！ オレ様！ 降臨だぜ！！」

と、同時にうざい奴も来た。机の上に仁王立ちし、左手は腰にあ
て、右手の人差し指が天を向いている。わけの分らないポーズだ。
氷雨の残る友人である。

普通の学生服なのだが、赤いたすきをかけている。ちなみにたす
きの意味は、特になかった。

「……じゃ、またな」

「……お、おう」

「……後でな」

「ちょいちょいちょい！！ オレは？　ねえ、オレは無視ですか？
??　ここまで頑張ったんですよ！」

たすきの男は他のメンバーからは無視されるのだが、これもある意味挨拶であった。

こうして、彼の学校生活の恒例の出来事は終わったのだった。

——そして、これが、かけがえのない大切なものだったと、彼が気づくのにそう時間はかからなかった。

第三話 始動

学校が終わり、放課後。

氷雨と雪は急いで家に帰った。

そして着替えもせずに、自宅にある畳が敷かれた部屋に向かう。

そこは、二台のノートパソコンと二つのダンボール箱がある簡素な部屋だ。

雪はダンボールを開け、中に敷き詰められた梱包材を丁寧に一つ一つ取り除きながら、“リアル・カモフラージュ”という機械を取り出す。

それは頭につける大きな丸い装置に、それに沢山のコードが繋がれた小さな丸い機械が四つある装置だ。その小さな装置は、手首と足首の四肢につけるものである。

「姉ちゃん、これでいいのか？」

氷雨はそれを体に一つ残らず身につけ、畳の上に横になった。コードの内の一つはパソコンに繋がっており、既にパソコンには“ダンジョン・セルボニス”のソフトがダウンロードしてある。これで、いつでもゲームを起動できた。

「ええ。でも氷雨、あっちについたらどこにも行かずその場所で待つてなさいよ。ゲームのいろはも知らないんでしょ？」

「……わかったよ」

氷雨はの頭の中は、既に興奮でいっぱいだ。

何ヶ月も待ったゲームが、いよいよ始められる、と。戦える、と。

だが、彼はどんなコネかは知らないが、今手に入れるのが最も難しいゲームを、弟の自分の為に入手してくれた姉に心から感謝している。だから、気まぐれに雪の言葉を見殺しできないのであった。

「——じゃ、はじめるわよ」

そして、この声を最後に氷雨の意識は失われた。
それは雪がマウスをクリックした瞬間である。

指が動く。

手が動く。

腕が動く。

膝が動く。

足が動く。

口が動く。

光を感じる。

それらは同時に行われ、徐々に脳が覚醒していった。例えるなら、朝起きた時に近いだろう。そして、少し前の記憶を思い出し、ゲームの世界に來たんだ、と考えてから目を開けた。

「……！！」

その眼下に広がる光景は、まるで変わっていた。

古びた畳も、何度も張り替えられた障子もない。代わりに合ったのは、上に雲がない快晴の天空。足元は並べられた石畳。周りにはレンガで作られた町並みがあった。

「……うつわ！」

その、色が塗られた鮮やかな仮想現実^{バーチャル}の完成度に、氷雨は言葉すら遅れる。ここを現実だと思わない人は居ないと思うほど、現実^{リアル}に近い完成度だと彼は思った。

氷雨はそんな感動を胸に感じながら、佇んでた場所から少しだけ移動し、道の脇に並べられた区切りのような段差に座り込む。

雪を待つためであった。

先ほどの自分が立っていた場所を見ると、ぽつぽつと人が突然現れる。どうやら皆このゲームを始めた者は同じ場所から始まるからだ。

そして、彼はそれに納得すると、自分の姿を確認し始めた。

服は紺の学生服ではなく布製の簡易なズボンとシャツだったが、それ以外は明らかに“自分”だ。顔を触り目の位置や鼻の位置、口の位置などを確認しても、それも“自分”だ。手の長さや足の長さ、^{リアル}全て現実と遜色がない。

だが、一つだけ違う部分があった。

胸や腹などの体の中心部分の動きが少しばかり弱いのである。これは“リアル・カモフラージュ”という機械の性能上しかたがなかった。頭や四肢の先端にしかつけないので、そこから遠くなればなるほど動きが僅かだが鈍くなるのだ。

しかし、それは氷雨のように全身の感覚が非常に鋭い人間に限ってである。一般人ならこのゲームをする上で気づきもしなかったのだ、特に何の問題はないとゲーム会社は判断したのだ。

「よかった。氷雨、ちゃんと待ってたのね」

氷雨が考察に耽っていると、目の前から自分と似たような雪が声をかけた。やはりだが、雪の顔も現実リアルと変わらない。

彼女は氷雨と同じ機械を付け終わると、すぐにゲームの世界に飛んだのであった。

それが、このゲームの特徴だ。

このゲームでは、仮想現実バーチャルをよりよく体験してもらうため、アバターといった自分の分身のようなキャラクターを作ることが出来ない。良くも悪くも現実の顔や身体が、そのまま影響されるのだ。

これに対して最初、発表時にはプライバシーなどの反論などが多数あった。

だが、メーカー側の身体のパーツを変えると最初のゲームの基礎的な動きが全く出来なくなり、慣れるまでに数週間の時間がかかる。それにこれに慣れたら現実リアルに戻ったとき身体が動きずらくなる、という弊害の説明の結果、反論は殆どなくなったのだ。

「ああ。で、姉ちゃん、最初はどこに行くんだ？」

待ちくたびれたように彼は言った。

これからたくさんできる戦いに興奮してか、氷雨は貧乏ゆすりをしている。おそらく、待ちきれないのだろう。

「決まってるじゃない。——チュートリアルよ」

「チュートリアル？」

「簡単に言うと、ゲームの説明ね。ゲームの最初には必ずあるの。例外的にスキップできるゲームもあるのはあるけど、大体はこれを

受けないと先には進めないわね」

「だったら、早く行こうぜ」

「フフツ、でも、もう少ししたらこの場所で説明が入ると思うわ。そうWikiに書いてあったから」

雪は笑顔の氷雨を見て、少し笑った。

彼の貧乏ゆすりの意味が、分かったのである。

『皆さん、お待たせいたしました。こちらに集まりください。チュートリアルを始めます』

そんな時だった。頭の中に電子音が響いたのは。

それと共に、そこに居た全員が、反射的に“その”声の方向へと目を向ける。

と、この時、氷雨はいつからだっただろうか、と考え始めた。この場所に存在していた人は誰一人減っていないく、増えた者もずっと居た。

なるほど、この場所に一定の人数を集めてから一斉に説明を受けさせる。ただしチュートリアルが始まるまでこの場所からは移動できないのか、と納得した氷雨である。

「氷雨、行くわよ」

氷雨がそんな考察を繰り広げて立ち止まっていると、雪が彼の行動を促した。そして、声の方向にあった一つの建物に、二人揃って入って行く。

カランカラン！

扉を開けると、甲高い鈴が鳴る。

その中はただの広い空間だった。暗く光の玉がいくつか浮かんでプレイヤーの顔を照らす地球上では、まずお目にかかれないような幻想的な空間だ。

だが、そんな場所に感動してる暇など、今はない。

『ゲームの説明はこちらで行います。画面をご覧ください』

また、頭の中に響いた。だが、不思議とその音に不快感は感じられない。

皆は突然に現れた真ん中に映し出された映像を見始めたが、その殆どのプレイヤーは一人で見ている。

どうやら、二人で行動している姉弟が、この場所では異様のようだ。

『それでは、まず……』

それから、ゲームの簡単なチュートリアルが始まった。

「……普通ね」

ゲームの説明としては、と雪は述べる。

それは数多くある武器の種類を軸に、一定の種類^{レベル}の武器熟練度を上げると使える技^{スキル}。そして、力量はどうやったら上がるか等の説明。それに付け加えるように迷宮^{ダンジョン}の簡単な仕組みや、フィールドの仕組みなど。他にはログアウトの仕組みとゲームオーバー時には所持金を全て失った上で最後にいた町に戻ることや、能力値^{ステータス}の見方など、全て合わせて説明は五分程度で終わり画面がプツンと消えた。

『最初の軍資金として、プレイヤーの方々には1,000ギルを渡します。ご自由にお使いください』

突如、目の前の空中には布袋が浮かんでいた。それはふわふわと漂っており、手に取るとジャラつと音を鳴らして、重力を取り戻す。ゲームのパターンとしてはこれもよくあると、雪は言う。最初に手に入れたお金で装備や道具を整えるのは普通なんだ、と知った氷雨だった。

『——最後にこれは助言です。北には、まだ行かないほうがいいと思いますよ。そこには、迷宮ダンジョンでも上位に位置する危険な動物モンスターがいますから……。では、今後とも“ダンジョン・セルボニス”を宜しくお願いいたします』

この言葉を最後に、頭の中の声は消えた。

そして、用の無くなったプレイヤーが次々とこの部屋から出て行くのだった。ただ、氷雨の顔だけは、なぜか少し綻んでいた。

姉弟が部屋を出るとその扉は、光となって霧散する。一度出ると二度と入れないような仕様である。

そんな外に出た光景は、ある“一つ”を除いて入った時と変わっていない。

それは“人”であった。

プレイヤー、ノンプレイヤーキャラ問わず、先刻とは打って変わ

って人数が増えている

「やあやあ、ユキ殿でございますか？」

そんな大勢の中、二人に喋りかけたのは似たような格好をした四人。

四人はまっすぐに雪を見つめていることから、二人をではなく、雪を待っていたようだ。

「ええ、じゃあ、もしかして貴方がノボル君かしら？」

「そうでございます！ いやいや会えてよかったですなあ！ それにしても美しい！ こんなお方と冒険できると思うと、こちらとしても心が踊りますなあ！！」

「そう。お世辞をありがと。こちらこそ、宜しくね！」

皮の鎧に、腰に両手剣を携えた小太りのノボルと雪が笑顔で握手した。

氷雨は仲間はずれとされているが、この五人はとあるゲームで噂になるほどのパーティーである。そんな雪を除いた四人は、今日だけ学校や会社を休んでおり、家にこのゲームが届いた時から集まってゲームの攻略を目指していた。

先程、雪から今から始めるとの連絡が入ったので、ノボル達は初心者が必ず通るこの場所に集まったのである。

そんな中、ノボルは雪が連れて来た氷雨が気になっていた。

「ところでユキ殿、次はこちらの方を紹介してもらってもいいでございますか？」

「ええ、弟の氷雨よ」

「ほーう、この子がヒサメ殿ですか。いやはや、これからよろしく
お願いするであります」

「は、はい、こちらこそ宜しくお願いします」

氷雨は固い感じで、差し出されたノボルの右手を握った。若干だが、頬も引きつっている。

どうやら彼は敬語がなれないようである。

「そんな緊張しないでいいでございますよ！　これから仲良くしよう
ではありませんか！」

「は、はあ……」

いや、氷雨は高テンションのノボルが苦手なのだろう。両手で握った片手をぶんぶん大きく振り回されながら、彼は苦笑いをして
いた。

「氷雨、この方は私達のゲームを入手してくれたのだから感謝する
のよ」

「ああ、うん」

「いえいえ、ユキ殿。同士の頼みとあれば、断れる筈が無いではあ
ります！」

雪のゲームの入手先はこのノボルだった。

このノボルという男は謎であつたが、ゲーム会社に多数のコネがあり、それを駆使して雪の分とは言わずこのパーティーの分のゲームは、全て彼が仲間の為にと用意していた。

その時、氷雨がこのゲームをしたい、と急に言つたので無理を承知にノボルに頼んでみると、二つ返事で了承との連絡が入つた。

もちろんそれぞれお金は払うのだが、それにしても六個分。へたしたら最多くのこのゲームを手に入れている彼の素性はパーティーの誰も知らないのだった。

「オレも宜しく！」

「うちも宜しくね！」

「僕も宜しくな！」

何故だか、雪以外の全員がハイテンションのパーティーメンバーに、氷雨はまたも微妙な表情で順番に握手していく。

それは今日始めて会つたといえる雪も、同時に。

その四人は槍、弓、杖とそれぞれの武器を装備しており、鎧はノボルと一緒に。

スタートダッシュを早く切れているだけあつて、その四人は周りの人たちよりかは豪華な金属製の武器で、幾分か強そうだ。

それは怪物を斃すと結晶が手に入り、その結晶を売つたお金でより強い武器等が手に入ると、チュートリアルで言つていた。

それから考えると、彼等はどれだけかは分からないが怪物を^{モンスター}少なくとも何匹かは討伐した事になる。ならば、^{レベル}力量も上がっているのだらう。と、氷雨は推測した。

「——で、ヒサメ君も当然我がパーティーに入るのは確定でありますよね？」

ここで、突然、氷雨にとってノ衝撃の言葉を、ノボルは放ったのだった。

第四話 プレイ（前書き）

読者の皆さん、作者の勝手なわがままを承諾していただきありがとうございます。

作品の修正は少しずつですが、これからもご応援お願いしますね。

第四話 プレイ

「確かにそうよね。氷雨はゲームを全然知らないし……」

「うちもその方がいいと思うで。ここから東に行けば簡単に力量も^{レベル}上がるしな」

ノボルのその意見に次々と賛同の意が募る。空気としては氷雨がこのパーティー、通称アンタレスに入るのが当然のようだった。

「氷雨くん、では、パーティーの手続きに行こうではありませんか！」

パーティーの手続きには、とある段階を踏む必要がある。

それは一つはパーティー組合所という店に入り、その掲示板の中で自分が入りたいパーティーを指名する。その後、リーダーが許可を出すと、正式にそのパーティーのメンバーとなる。ここでの注意は、一つのパーティーには六人までしか入れないということであった。

もし仮に、新しくパーティーを作りたい場合は、パーティー組合所で新規パーティーの要請をすると誰でもできるのである。

「氷雨、行くわよ」

と、雪が、氷雨の手を取ろうとすると、彼はその手を払った。そして一言。

「——嫌だ」

と、言った。

彼は、さつさと戦いたかった。一人で戦闘を、それも高純度の死闘を行いたかったのだ。そこに仲間などというのは不要だと、氷雨は考えていたのである。

「えっ、どうしてであります？」

「なんでなんだよ？　こう言っちゃあ悪いが、初心者には安売りだぜ」

「うちらそんな弱いわけちゃうしな。ほんまお得やで」

「僕らは現在、このゲームの攻略の五本の指に入ってます。なので、パーティーに入りたい方は沢山いるんですよ」

氷雨のこの発言に、四人からは次々と驚きの声が飛んだ。

彼等、アンタレスはスタートダッシュが少しばかり遅れたが、攻略スピードが群を抜いて早く、とある初級迷宮を二つもクリアしている。これは、今、三組しかない凄まじいことで、彼等のパーティーに入りたい者は後を絶たない。

それに、他の二組のパーティーはじつくりと時間をかけて迷宮をクリアした。だが、彼らはWikiなどの誰でも編集が出来るwebサイト等で情報を集め、早々とクリアしているのだ。

「はあ、氷雨、いいからこのアンタレスに入らない理由を教えて？」

最後に雪が聞いた。

彼女は予想はついている。

——獣のように獯猛な彼は、血を求めていた。それを祖父から教えてもらっていたからこそ、雪も氷雨の“戦闘衝動”を知っていた

のだった。

「決まってるだろ。存分に、心行くまで、——“戦^やりたい”んだよ」

最後に、彼はそう問題発言をした。

これに対し雪はやっぱり、と溜息を一つ。そして、冷静に基本馬鹿の弟の目指す場所を聞く。

「で、どこに向かうの？」

「北——」

「——でしょうね。ま、死なないように頑張りなさいよ？」

これを最後に彼はこの“ヴァイスの町”を去った。

動揺の声はアンタレスだけでなく、耳に入った通行人までも発する。だが雪だけはそれを分かっていたように、呆れ顔をしていた。

「ユキ殿！ ヒサメ殿を止めなくてよかったのでありますか？ あそこは……？ 北の森”は……とてつもなく、危険な場所なのですよ？」

「いいのよ。あんな馬鹿はほっとけば。それより私たちは武器や防具を整えに行きましょう？」

そう実の弟へ冷たい雪に、アンタレスの仲間は戸惑うが、

「ゆ、ユキ殿がそう言うなら分りました。では、装備品の調達に行きましょう!!」

「お、おう」

「ええ」

すぐにノボルの声に賛成し、五人はヴァイスの町中へ消えていった。

そんな街中での五人の会話は、凄く明るいものであった。

「ユキ殿、知っていますか？ ヴァイスの西通りには、まだサービスが始まって数時間なのに“凄腕”の職人がいるんです！ 是非、そこに行きましょう！」

「そうね。でも、私はまだ1,000ギルしか持っていないわよ？」

「ご安心ください！ このノボルが、全てのお金を出すであります!!」

「ありがとう」

「いえ！ 雪さんのためならいくらでも……!!」

実は“ダンジョン・セルボニス”は剣士や槍使いなどの戦闘技^{スキル}だけではなく、鍛冶や服飾などの生産技^{スキル}も充実している。

彼らはNPCが売っている装備を探しに行ったのではなく、同じゲームプレイヤーが作り出した装備を探しに行ったのであった。

（さて、氷雨は何匹斃せるかしら？）

雪は街中でアンタレスのメンバーと話をしながら、氷雨のことを考えていた。

まさか、ゲームの仕様を全く使わずに戦う人間はどんな強さになるのか、という疑問に彼女は思いをはせていたのだ。

ある意味、このゲームを作った人間ですら考えないことである、古流武術でのゲームプレイ。

（楽しみ……ね！）

「ユキ殿？ どうして立ち止まっているのですか？」

「ごめんね、すぐに行くわ」

雪はいつのまにか立ち止っていたのか、ノボルに注意され初めて気がついた。

（ま、頑張りなさいよ）

雪はそう思ってから、仲間を追いつくまで走り出した。

テュートリアルで警告されるほどの難易度を誇る“北の森”。まだ、このゲームのサービスが始まって、八時間ほどしか経っていない今の状態で挑むのは無謀とされている領域で、一組だけ挑んだパーティーが居たが、結果は四分で全滅。

“北の森”を超えた先にあるとされる迷宮ダンジョンの攻略はおろか、森を通り抜けることすら難関とされる場所で、間違っても初心者が一人で挑むような場所ではないのであった。

氷雨は最初に持っていた1、000ギアで、上から羽織る灰色のフード付きマントを買っただけで、北の森に来ていた。

武器も無く、防具も無く、薬草などの回復薬もないゲームを舐めていると思えないような装備である。いや、ある意味ゲームをしに来たわけではなく、習った武術を試しにきた彼にとっては、当然の装備だと言えるだろう。

「はあ……はあ……」

そんな準備など全くしていない彼の状態だったが、この“北の森”に訪れて早十分、未だ彼はゲームオーバーになっっていなかった。これだけでもある意味彼は、ゲームプレイヤーの中の異常だと言えるだろう。

人が作つたとされるような道は無く、全てが緑に染まっているこの森。

危険、そうチュートリアルで言っただのも氷雨は納得できた。

自分に襲撃してくるのは強く、大きく、気高く、動物だからだ。

三百六十度周囲を常に警戒してなければ、いつゲームオーバーになってもおかしくなかった。

それにまだ彼は“一匹”も討伐していないのである。

サッ！

今も狼をモデルとし、体色が白で全長2メートル程の動物が、モンスター後の草むらから飛びかかってきた。数は一匹。遭遇したのはこれで

三度目。

しかし、前回も前々回の遭遇時も最後には逃亡した。

それは、敵の弱点は分からず、素手の攻撃も効かず、間接も極められない相手に氷雨が苦戦していたからであつた。

そして、今回も、隙を見つけ出し何とか逃亡した。

逃げた先は木の上。

ここまでは良かった。

だが、彼に休憩できる暇などなかった。すぐに上空から鳥に似た動物が数十匹。氷雨は額にかいた冷や汗を手で拭い、足場の悪い幹の上で腰を低く構えた。

その鳥のような動物は、モンスター翼を畳み、鋭いくちばしで突き刺そうと、氷雨に向かつて――落ちる。

一匹目は最小限の移動で避けていた。ただ、皮膚を浅く切つてしまったので、視界の左端に固定されているHPヒットポイントだけは、着実に減っていく。

「ちっ!!」

十匹目まではそれで攻撃を避けたのだが、十匹も来ると、急に氷雨は追い込まれた。

——ここで枝の先端まで来てしまったのである。

ピンチだった。凄くギリギリの状況だった。

だが、彼は慌てることだけはしない。

すぐに木の枝から跳躍し、下にいた狼がモデルの動物に、モンスター踵落としを行った。既に氷雨の事を視界から外していたその動物は、モンスター上からの彼の攻撃を予測できず、頭蓋に直撃する。

ゴンッ！

鈍い音が響いたが、それだけであった。

敵はHPがあまり減らず、大したダメージには繋がっていない。

「ははっ……！」

上からは鳥。

正面には狼。

それぞれに似た怪物を位置を確認した上で、氷雨は少し笑う。

ああ、楽しい、と、この絶対的状況を分かった上で、彼は笑ったのだ。

「これだよ、これ。こういうのが欲しかったんだよ！」

彼は、日常では絶対得られないような命のやり取りに興奮していた。

やっと、念願の“戦い”^{モンスター}が出来る、と。戦れる、と。

まだ、一匹も怪物を殺してはいない彼だったが、既に敵を一匹殺したような充実感に浸っていた。

グアアアアーーーー！！！！

だが、それに浸っている余裕など——無い。

上空の鳥の攻撃は当たる寸前で、狼も氷雨に飛び掛っている。

その二つの攻撃をそれぞれギリギリまで引き付け、転がるようにして氷雨はその場から離れた。すると、鳥のくちばしは次々と狼を貫いた。

狼は悲鳴を上げる。鳥は標的を氷雨から瀕死の狼へと変えた。

弱肉強食が、この世界の縮図だからだ。

人も亜人も怪物でさえも、弱者は強者に虐げられる。このゲームはそんな重厚な世界観で作られていたのだ。

「はあはあ……」

氷雨は疲労した体で、その場を離れた。

この数瞬の激闘は結果的に氷雨の勝利となったが、彼の力量は上がっていなかった。このゲームでは、自分もしくはパーティーメンバーが怪物を斃さないで経験値が手に入らないのである。したがって、本来貰えたはずの莫大な経験値によって起こるレベルアップが行われなかった。

ガサッ！

だが、そんな彼に、休息の時間など与えられない。

また、すぐにどこかで草が動く音が聞こえたのだった。

（今日は満足したし、そろそろ帰るか）

それから数十分、彼はずっとその森で彷徨っていた。その間、数多くの怪物と気を抜けない攻防を行っていた。

HPは少しずつ減っていたのだが、0になることはなく、氷雨は結局ゲームオーバーにはならなかった。

そしてほどよい戦いの満足感を感じていた彼は、そろそろログアウトしようと思っていた。

それはメニュー画面に搭載してあった時計を見て、夕食の時間だと知ったからである。

もし、夕食の時間に遅れたら、姉に叱られる。この折角のゲームが出来なくなるかも知れないかと、危惧した結果だった。

「メニュー、オン」

そうして、テュートリアルの説明にもあったメニューを開けると、目の前に透明の液晶が現れた。その中にはログアウトのボタンがあり、氷雨はそれをタッチした。

また、あの意識が消失する感覚がくる。

こうして、彼の初日のゲームプレイは終わった。

これが最後のゲーム——とは知らずに。

今回の氷雨の討伐数0。——未だ、力量^{レベル}1。

第五話 リアルとバーチャル

夢から覚める。

氷雨の現在の感覚だった。少し前までの程よい殺気と適度な戦闘の後だったので目など開けず、ずっと、ずっと、その感覚に包まれていたかった。

「おいおい、これ……なんだよ……っ！」

「お、俺、ログアウト……したよな？ おかしいだろ、これっ！？」

「お前ら、何者なんだよっ！？ 管理者か？」

だが、そんなわけにはいかない。

傍らから聞こえるのはしよぼくれた祖父の声ではなく、凜とした姉の声でもなかったからだ。声質は上がり、次々と湧き出る情けない言葉。

（チツ、黙れよ）

氷雨はまだ目を開けず、言葉の主をそう思った。“今”の自分がどんな体勢でどんな場所にいるかなど、些細な事だと考えていたからで、悲鳴を雑音のコーラスだと判断したのである。

彼は興が削がれたような煩わしい気持ちで、視界に光を受け入れた。

（……あれ？）

彼は首をかしげた。

そこにはざつと見て、五十人は存在するだろう。

氷雨を中心とした手を縄で縛られた数十人の人間に、剣を持って困う数人の戦士。戦士の眼は鋭くギラついており、常人の目じゃない。幾戦の死闘を渡ってきた“武芸者”の、眼であった。

その様子を見て人一倍察しの悪い氷雨は、欠伸を一つ。

彼の思考は表面的には機能しているが、実際は寝ぼけが半分ほど混じっており殆ど働いていない。阿鼻叫喚を響かせるこの領域で、ただ一人彼だけが慟哭せずに、樂觀していたのだ。

——慌ててるなあ、と。

(ふう、腹減ったな)

と、お腹がぐーと鳴った時、氷雨はとある違和感に引つかかった。お腹が空いたのだ。否、それだけではない。

もし、ゲームの世界ならここまでお腹の動きを再現率が低いはずなのに、今は腹の全てが“完璧”に動く。腹筋や背筋も、だ。ゲームの世界では無かった筈の稼働率である。それは、現実と体全ての動きがなんの遜色もなかった事を意味する。

「聞いてんのかよ？ 俺達のロープを解いてくれよ！」

「そつだそつだ。ここはどこなんだよ？」

氷雨同様、縄で後ろに固定された人間が、周りの剣士達に声をかけた。その剣士以外の誰もが、初心者用の装備である同じ型の布の服である。氷雨だけはその布の服の上に、安っぽいマントを一枚着ていたが、それはお世辞にも防具とはいえない薄いものだ。

初心者の服は同じで、その上から防具や武器を身に付けたり、お

金に余裕が出来たら布の服もより高価な物に買い返られるというシステムが“ダンジョン・セルボニス”というゲームだ。その説明を氷雨は覚えていた。

とすると、ここはゲームの世界で、周りの人間は自分と同じゲームの世界の人間——つまり、ゲームプレイヤーと考えた。しかし、氷雨はこの推測に自信を持って答えられない。なぜなら、ここがゲームの世界ならば、この腹の動きが感じられないからである。

——ゆえに、現実リアルと仮想現実バーチャルという二つの概念が、氷雨の中で激突した。どちらとしてもおかしくはない。どちらとしても納得は出来る。

でも、どちらと納得をしても、違和感だけが残った。
現実リアルならば、自分がいるのは家のはずだ。今頃、実の姉と実の祖父と一緒に住んでいる家の畳の上にいる。こんな丸裸の土の上で座っているなど有り得ない。

ならば仮想現実バーチャルとすると、自分はある危険な怪物モンスターが多く出現する“北の森”にいるだろう。怪物ではなく、人が何十人もいるなど考えられない。

それにHPの値も視界に無かったし、メニュー画面も現れなかった。

氷雨は少ない脳を絞って思い出す。
自分は確かにログアウトした、と。その時、ログアウト以外のボタンは触らなかった、と

他に情報はないかと探すが見つからない。手詰まりであった。そんな風に、無言で思考を巡らせていると、——突如、声が鳴っ

た。

「皆さん、聞こえますか？ 君達是我々の“奴隷”となったのです！」

ゲームプレイヤーであろう人の、質問に答えるかのように、遠くの壇上に立っていた煌びやかな貴族風の豪華な衣装の男が高らかに言う。

残酷な内容を、あっさりと。

これに全員が声を失った。

皆が、誰もが、理解したくないのだ。

その単語の意味も分かる。その言葉も通じてる。ゆっくりと、頭の中で何度も何度も何度も確認をする。

そして、ぐつと——飲み込んだ。

「ふざけんな！」

「私達を家に帰して！」

「開発者はどこにいるんだ！！」

ここにいる原因は不明だが、“弱者”に落ちた、と。それはゲームプレイヤー達は分かっていた。

しかし、それぞれが無駄だと言わず、口々に反論した。

——納得できないのだ。

奴隷という身分に。もし、勇者や英雄としてなら、もっと高貴な立場なら、こんなに反抗はしていなかったかもしれない。

「——黙らせなさい」

けれども、その行動が逆効果だった。

“上”の人間が、“下々”の人間の戯言などに付き合う暇は、どこの世界でも無いものだ。“上”の人間は、常に自分の事を優先させるからである。

「はい、カナヒト様……」

剣士の一人は、貴族風の男の命令に従い、腰にあった剣を——抜いた。

意味は子供でも分かるはずだ。

沈黙を要求するのに、最も簡単でこの上なく早い方法は恐怖で相手を縛る。これが最も早く、ある意味単純な方法だ。

「あ……あ……」

それは誰かの嘆きだった。

剣士は別に誰でもよかったのであろう。

男でも、女でも、老人でも、中年でも、若者でも、子供でも、脅しつけるのは誰でも。

そして——剣を振るった。

それは一番近くに居た男の太ももに当たり、線が走る。血は勢よく飛び出た。次に出たのは斬られた男の声にならない悲痛。彼が悲鳴を上げなかったのは、今度声を出すと殺されるとつさに思ったのだ。

男の、いい判断であった。

これに、誰もが静かに冷静を失う。

ゲームの仕様では怪我などせず、怪物モンスターの攻撃でも痛み一つ感じない。ただ、HPが減るだけ。

だが、今の状況は違う。

斬られたら傷を負うと、斬られたら痛いという、人間として当たり前の感情が蘇るのだ。

だが、誰もそれを口には出せなかった。

恐怖という針金が、全身を強く縛っているという感覚が、心に染み込まれたからだ。獅子が鞭に怯え芸をするように、溺れた人が水を怯えるように、殺されるかもしれないという“最悪”の予測が、脳裏に染みついた。

それが——悲しい現状だった。

「ふふつ、何度見てもこれは飽きませんね。素晴らしいです」

貴族風の男は円になっている自分の静かな“所有物”を見て、嗤う。

これ等を生かすも殺すも自分の自由という愉悦に浸り、また多くの財が手に入ると嗤ったのだ。

やはり、“上”はいいとも男は思った。

一方的に、下から搾取し続ける権利があるからだ。

同時に、“下”にはなりたくないとも思う。

どの権利が無いからだ。生かさず殺さず働き続け、使い捨てのようにならなくていい。ただ、それだけの存在にはなりたくない。

「あーはっはっはっは！！！！！！」

男はまた、嗤う。

プレイヤーの中には反乱を起こしたいと思う者も居たが、手が縛

られたままでは、無駄死になるしかない。

ぐつ、と唇を噛み締め、辛い未来に、堪えるしかないのだ。
そう達観していた。諦めた、と云ってもよかった。

(……)

——けれどたった一人——例外がここにいた。
多数の怖さに震える人間が存在する中。仮想現実バーチャルじゃない現実リアルに、
より喜び、より愉悦し、より感動し、震えていた人間がいたのだ。
萎えた感情も蘇り、下を向いた座った状態で、

最初に、ゴキッ、誰にも聞こえぬよう、手首の間接を抜くように
無理やり外した。関節が外れて縄が緩むと、両手を拘束から外した。
次に、ゴキッ、と誰にも聞こえぬよう今度は関節を無理矢理入れ
た。手のひらを地面につき、全体重を片手にかけるような感じで、
一個ずつ両手の関節を入れたのだ。
そんな彼には、現実リアルという心地よい激痛が走り、貌に笑みが宿っ
た。

最後に、ポキッ、と誰にも聞こえぬよう座ったままで、全身の骨
を満遍なく動かした。

首も。

肩も。

腹も。

足も。

全ての動きは、正常であった。どれも十全に動かせる。

これで、彼はいつでも“衝動”を解き放つことができる。

——戦闘という、衝動を。

自分の状況の見当などさっぱりであったが、一つ分かるのはあの貴族や剣士は悪者なので、殴ってもいいとの事。

初めての人相手という“戦い”が、彼を怪物相手の時よりも興奮させたのだ。

——さあ、と。

第六話 初戦

カナヒトが多くのゲームプレイヤーを見て、嗤っている最中、

「ははっ——」

彼も嗤った。

顔を伏せ、口角を上げ、座ったまま。手は後ろにあるままで、見た目の変化は何も分からなかった。

だが、会場は静かさに染まる。

異常だからだ。

草食獣が、肉食獣に笑いかけるように、下の者が上の者を貶すように。本来ならありえない現象だったからだ。そのため、周りのゲームプレイヤーも、剣士も、貴族風の男でさえも、その嗤った人物を信じられないような目で見た。

「——ああーおもしれえ。非常におもしれえよ——」

見知らぬ人物に語るようなその声は、静かな広場に響き渡る。

この時、誰もが彼を注目した。

そこは異様な静けさだった。風も、木の葉が掠るような音も、息でさえ、大きいと思えるほど静かだった。

「——さあ、戦^やろうぜ」

彼が脈絡もなく、そのなんの変哲もない顔を上げた。それは歓喜に染まり、快感に溺れ、快楽を求めるような貌だった。

彼の貌は——獣の貌だったのだ。

戦いに餓え、血に餓え、勝利に餓えていた現実^{リアル}。

貴族風の男は、彼が勝手に決めた悪人である。ならば、我慢しくていい。誰に拳をぶつけても構わないという考えになる。

そんな風に、免罪符を得たような気がした。

と、同時にこれが彼の“本性”であった。

危機的状況では、その者の剥き出しにされた心が見えるという。ならば、この“戦いたい”という欲求が、彼の全てなのだろう。

「なっ、なにがっ！　なにがおかしいんですっ！　誰でもいいのであいつを黙らせてくださいっ！」

当然、狂ったような事を言い出す彼に、貴族風の男はうろたえた。

——訳が分からない、と。そして、すぐにその気持ち悪い貌をトドメをさすよう剣士に命令する。

ゲームプレイヤーで出来た円の真ん中より少し外れた彼に、囲んでる十人の内の一番近い剣士が近づく。座っている彼に、命令どおり、剣を——抜いた。

「はっ！？」

それは一瞬の出来事である。

誰もが予想にしていなかった“結果”だった。

彼が、“氷雨”が、立ち飛ぶように剣を避けたのだ。

縄が無く、全身が自由になっている彼の姿を見て、貴族風の男をはじめ様々な人間が驚愕に染まった。

「ふふっ、どんなトリックを使っただかは知りませんが、問題ありません。——たかが、力量^{レベル}1です。この中の底辺の中の底辺です。“

雑魚”は蹴散らしなさい！」

貴族風の男は慌てはしたが、取り乱しはしなかった。

氷雨が、^{レベル}力量が1だからである。この世界では、生まれて15程度の人間ならば必ずしも2以上は持っている。それがどんな職業でも、だ。稀に体が病弱な場合などに限り、1というケースもあるが稀は稀だ。滅多にない。

それは男が奴隷にしたがっているゲームプレイヤー何十人も同じだ。^{レベル}彼等の力量は平均5。最高は12で、最低が彼の1。彼だけが^{レベル}力量1のため、貴族風の男は氷雨の顔をよく覚えていた。

^{レベル}力量だけに意識をいき、彼を雑魚を決め付け、その鍛えられた肉体は気にも止めなかった。

その力量絶対主義は、剣士にしても同じである。^{レベル}力量のみを気にし、30程度を彷徨っている剣士たちにとって、己の十分の一以下などが反抗するなど、万死に値すると思った。

「死ねっ！」

だから、その剣士は己の頭で彼の強さについてなにも考えず、今度は横に薙ぎ払った。

彼はそれを潜るように避け、剣士の体制を崩す為だけに、拳を剥き出しの顎に一発。予想外の一撃に、体を揺らしながら戸惑う剣士。

「まっ、死ねや」

その後、彼は剣を持っていた右手を、引くように自分の元へ引き寄せる。その向かってくる相手の顔を両手でしっかりと、抱きかかえるように掴んだ。

ポキッ！

そして、首を掴んだまま、前転のように剣士の向こう側まで飛んで、曲がらない方向まで首を曲げた。

男は、天を見上げるような顔の位置のまま頸椎が圧迫される。そして、今折れ曲がった首に、今度は振り返った勢いのある裏拳が炸裂する。上を向いたまま首を横にしたおかげで、完全に氣道などを閉じられ、——絶命した。

首の骨の音が折れる音は、呆気なく鳴ったのだった。

男は白目を向き、涎は口から溢れ出た。その姿は、かの有名な武蔵坊弁慶の立ち往生に非常に似ていた。

「鳴……呼……」

友の変わり果てた痛々しい姿を見て、仲間の剣士が嘆く。
それほどまでに、死んだ兵士は痛々しい姿だった。

「おいおい、あいつ正気かよ！ オレは……大丈夫だよ……な？」

「いや、これは夢だな。そうだ。そうに違いない」

「キャアアアア——！！！！！！」

一方、ゲームプレイヤー達も始めて目にした“人殺し”の光景に戦慄を覚える。

ある者は氷雨に恐怖を見た。

ある者は現実逃避をした。

ある者は耐え切れなくなつた恐怖に悲鳴をあげた。

この広場は一気に騒がしくなる。これまで亀裂が入りながらもなんとか決壊を逃れていたのが、“殺人”というきっかけにより、ゲームプレイヤーという集団のパニックを引き起こしたのである。

縄で手を縛られているため、立つことしか出来ない彼ら。

だが、もう一つ剣によって動いたら殺されるという針金が、彼らを縛っていた。だから立ったまま彼らは足踏みだけをして、動けずに居たのであった。

（以外だな。まあいいか。さて、あいつは弱^{ます}かったのだが、この中で誰が一番強^{つま}いんだろ？）

そんな中、初体験した人殺しに氷雨は、罪悪感を微塵も感じなかった。

気持ち悪くなる、と本や漫画ではよく書いてあったが、そんな気持ちは湧いてこない。むしろ、早く次がしたい、という感情が強かった。

そんな氷雨は人間として最低ながらも、次の獲物を探す。まるで血の味を初めて覚えた獣と、同じ行動だった。

きよろきよろと彼は辺りを見回す。

六角形の壁によって閉ざされているこの広場。出口は二つ。その両方が脇を屈強な槍を持った兵士で固めており、彼らも強そうであった。

だが、彼の脳は“より”強い獲物を見つけ出す。

そして、見たのは貴族風の男。

正確には貴族風の男の護衛である二人の剣士を見ていたが、この場の全員が“にたあ”と嗤った氷雨の顔が貴族風の男に向けられたと思った。

トストスト！

一歩ずつ一歩ずつ噛み締めるように大地を踏め締めながら、氷雨は標的に向かって歩みを進めた。

それに、ゲームプレイヤーは皆、道をあけた。

殺されたくない、という一心からだ。今の氷雨は、見るだけで怖くなるほど、殺気立っていたのだった。

目が合ったら殺される、そう思ったほどだ。

「皆さんッ！ あいつを殺したら特別ボーナスをあげますっ！」

そんなモーゼの海割りを垣間見て貴族風の男は、“にたあ”と嗤った氷雨の殺意に、顔を蒼白にし怯え、奴隷なんかよりも自分の身を守ることを考えた。剣士がこれだけいたら勝てる、と男は思ったのだろう。

剣士は特別ボーナス、という輝きの持つ言葉に引かれ、氷雨に近づいた。氷雨を囲んでいたゲームプレイヤーも剣士から離れた。これにより、氷雨、貴族風の男、剣士の間に人は無くなったのであった。

（やった！ これで死中に活ありだ！）

その頃、混乱の中でゲームプレイヤーの一人が――動き出した。

順調に進めていたゲームからログアウトすると、仲間の雲林院や雛形と共に氷雨と同じようにこの場所に居た。

彼こと、久遠光は仲間を助けたかった。だが、迂闊な行動に走ると死ぬ、というのがあの剣士の行動で分かり、助けたいのに助けられないと、非常に歯がゆい思いをしていた。

だが、そんな彼に好機が訪れたのだ。

氷雨が剣士の一人を殺し、彼が敵の目を全員引き付けていたからである。

久遠はばれないように殺された剣士に近づき、そっと足元に落ちていた剣で、後ろに縛られた縄を切ったのだ。

あいにくそれは、ゲームプレイヤーも、剣士も、カナヒトも、氷雨を注目していたので誰にもばれなかった。

「静かにして……」

「はい！」

「ええ！」

その剣をこつそりと持ち、久遠は仲間の雲林院と雛形の縄を切った。彼女らの頬は、久遠という王子様に助けられたことにより、ほんのり朱色に染まっている。だが、そんなのを久遠は気づいていなかった。

久遠はその後、騒ぎにならないように、近くのゲームプレイヤーの縄を切っていくことになる。

——そして、これが次なる“混沌”を招く。

第七話 混戦（前書き）

読者の皆様、変わらない応援ありがとうございます。

これからも頑張るので、気軽な感想などをよろしくお願いしますね。

第七話 混戦

（一発か……）

氷雨はカナヒトへと歩きながら、体の調子を確認していた。

体に異常があつたのは両手で、やはり、関節を無理やり外し、無理やり嵌めたので痛い。

右手に殴れないほどの激痛は無いが、左手は使えそうにない。先程の裏拳により、手首から先の感覚がもう無いのである。

そう考えると、右手も一度しか使えなかった。一度だけ使った左手の感覚が無くなったことを考えると。

残り一発の弾丸で、十人以上の戦士を斃さなければならぬのだ。

だが、この絶体絶命の苦境に——より彼は燃えた。

目を滾らせ、手が駄目でも足があると。

そう考えると、剣が峰に立っていたとしても、貴族風の男の隣にいる剣士へ氷雨は全速力で——走れた。

「旦那様のために死ねっ！」

彼が地を駆けると、右からすぐに邪魔者が飛んできた。

氷雨は斬り下がる剣を一步下がって避け、剣を掴んでいる両手を蹴る。武器が無くなり剣士を無力化できたので、氷雨はそれ以上

今度の剣士は、無言で突いてきた。前の男は声を出して攻撃したから氷雨に気づかれた、と思ったためである。

彼はそんな攻撃を上^{かわ}に飛んで躲す。

そのまま遠慮なく蹴り、剣士の男を沈めた。頭への、上段蹴りであつた。兜の上から遠慮なく蹴つたため、足に痛みが奔るが、両手の激痛に比べるとなんてことはない。

氷雨は足の痛みなど気にせず、また狙いの男に向かう。

「はあっ！」

「ひゅっ！」

久遠が剣を頭上に掲げたのは。

とがらせた金髪に、端正な目鼻立ち。掲げた剣が太陽によって輝き、後光が差しているかのような光彩がそこにはある。

殆どの人間が、怪しいと思えるほどの魅力的を持つ彼に目を向けた。その時、時間が止まったと感じる者までいた。

「――全員で協力したら、数で対抗したら、どんな強敵にも勝てないことはないっ！ 僕たちの正義は、正義は必ず勝つんだ！！」

久遠は、自分達を正義だと決め付けている。

縄で自分たちを縛り、仲間の雲林院や雛形を危険な目に遭わせた彼等。それだけで、久

「オレ達でもできるよなっ！」

「ああ、だってこんなファンタジーな事滅多にないぜ？」

「正義は私たちにあるもんねっ！ 奴隷なんて制度を使う彼らが悪者っ！」

だが、時すでに遅し。

奴隷ならぬゲームプレイヤー達の士気は上昇していた。それは、上限を知らなかった。

久遠の剣によって縄が解かれた十人は、それぞれが刃物も使わず別のゲームプレイヤーの拘束を外す。自由になったゲームプレイヤーは鼠算ねずみざんのように増えていった。

それは剣士たちの圧倒的有利な状態が終わったからで、ここからは血みどろの勝つか負けるかの争いだからだ。

勝者が全てを得て、敗者が全てを失う——そんな戦いだ。

この戦い、分だけ見れば、おそらくゲームプレイヤーの方が高いだろう。

いかに剣士たちの力量が^{レベル}高いとしても、それが有利になるのは一対一の場合だ。一騎当千の実力がない限り、人対人であれば4〜5人で囲んでしまえばまず負けることが無い。

——人海戦術が、戦場では一番強いからである。

そして五十人

序奏曲。

二つの軍団は、まもなくぶつかるのであった。

「——ははっ、やっとだな」

そんなゲームプレイヤーと剣士による激戦の少し前、氷雨も貴族風の男とその護衛の剣士の元に来ていた。

護衛の剣士は貴族風の男の前に出て、氷雨と睨み合う。

「お前の強さの理由は分からない。興味も無い。——だが、我輩をこれまでの者と一緒にするなよ？」

剣士は言った。

自分の実力はこの中で一番上だ、と。

「——ふんつ、減らず口が言えるのも今の間だけだ」

反対に、護衛の剣士は、腰の剣を抜いた。

太陽の光が鈍く光る剣。それは魅せるために作られたわけではなく、儀式のために作られたわけではなく、ただ——人を殺すために作られた剣だ。

ゆえか、怪しい魅力があった。

鈍色に輝くその剣には、人の目を引きつけて止まない怪しい魅力があった。

「早く、早く雑魚を殺してしまいなさいっ！」

そして、この二人の戦いは、貴族風の男の罵声をきっかけに始まったのだった。

第八話 終戦

「うおおおおおおお——————！！！！！！！！！！」

ゲームプレイヤー達は勇ましく雄叫びおたけを上げ、死ぬという恐怖を取り除いた。

そこにまともな思考判断などない。
作戦ともいえない久遠の作戦に従い、各々が剣士に向かって突進して行くのである。

その先頭は久遠であつた。

自らが旗揚げした烏合の衆を率いるためだ。ばらばらな集団を一つにするには共通の目的を持たすことが最も早い。

「弱い奴がオレ達に逆らうなっ！」

剣士は嘲笑った。

ぶつかり合った二つの剣は何度もぶつかり合う。

押されているのは久遠だった。秀でた反射神経だけで、何とか攻撃を防いでいるが、後ろに下がりがりながら逃げているだけでまず敵わないだろう。久遠もできるかぎり粘ってはいるが、いずれ負ける。これもこの“世界”では当たり前であった。

「はっ！」

だが、本来なら当たり前に勝てるはずだった剣士は、負ける羽目となる。

も何人もやってきて、剣士の動きを封じ込んだ。

彼らの封じ込め方は、右足、左足、右腕、左腕を、それぞれ一人ずつ全身で止める。こうなれば、幾ら筋力があるうとゲームプレイヤーに抑えられない道理は無い。

所詮、どれだけ力量^{レベル}が高かろうと、剣士も人間なのだ。

筋力差はあるが、それはあくまで人間範囲でのこと。

もし、彼等が別の“人種”なら、結果は違っただろうが、同じ人間ならばそう大きな差は出ない。

氷雨だつて、この人数に抑えられれば攻撃

崩壊したダムから流れる水のように、逆に勢いは増えていく。

卑怯、と剣士達は思っただろう。

ゲームプレイヤーのまともに戦わない戦法に。

だが、それを出す者は剣士の中に居なかった。

自分達も気が失っていたゲームプレイヤーをここまで連れて来たのだから……。

その数十分後、この場の主導権は逆転していた。

一方、氷雨はの中で最強の剣士相手に苦戦していた。
攻めきれないのだ。

